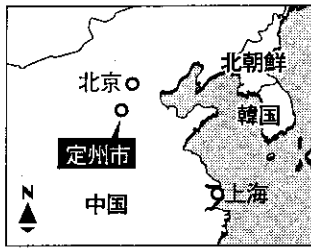


ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して

19

文化



ら、学院長として村からのオルタナティブづくりを取り組んでいる。学院の敷地は約四畝。そのうち一・七畝が有機農業の実験農場だ。建物は村が



中国の農村復興運動

越田 清和



発電所建設などの開発によって土地を奪われる農民たちが政府に抗議する動きが、ここ数年、中国で頻繁に起きている。急速に進むグローバル化(都市化と工業化、市場経済の導入)が農民の土地を奪い、都市へ流入する膨大な出稼ぎ労働者を生み出し、中国全人口の六割を占める農民と農村に破壊的な影響を与えているのだ。

中国人民大学の温鉄軍(ウエン・テイエジュン)さんは「中国の伝統と文化を基盤にした農村の自主的な復興」がその鍵だと語る。彼は二〇〇三年八月、河北省定州市郊外の翟城(ジヤイチェン)村に「ジェームズ・イェン農村復興学院」を設立し、香港のNGOや村落行政委員会と協力しながら

提供した廃校を修復して使っている。台湾の建築家が設計した木造のモデルハウスや、半地下の集会所、大便と小便の沈殿槽を分けたトイレもある。温さんは、学院の活動の柱として「持続可能な生活、民衆の連帯に基づく共同性の創出、民衆の多様な文化の見直しの三つをあげる。

この柱にそって、中国全土から集まってくる農民や学生へのトレーニング、有機農業による実験農場、農村にある材料を生かしたエコロジカルな建築の推進、保育園や文化グループづくりなど翟城村との共同作業という四つのプロジェクトを進めている。

新しい共同性を創り出す

「こじだ・きよかす」さっぽろ自由学校「遊」理事。日本平和学会理事。1955年、北海道出身。著書に「徹底検証ニッポンのODA」「ODAをどう変えればいいのか」「いすれも共善」など。

ただし、これは農業技術材にしたセミナーが行われを教える学校ではない。農村開発プロジェクトを行う村開発プロジェクトを、農

NGOでもない。協同組合本から問い直す作業でもある。一九四九年の中華人民共和国の成立から五十年以上経つのに、なぜ農民は貧しくなるのか、なぜ力ネ中心主義が進んでいるのか。こうした問いに既成の理論では答えられない。だから

学院が取り組む農村の復興は、現在の中国社会を根本から問い直す作業でもある。一九四九年の中華人民共和国の成立から五十年以上経つのに、なぜ農民は貧しくなるのか、なぜ力ネ中心主義が進んでいるのか。こうした問いに既成の理論では答えられない。だから

こそ、世界のオルタナティブな実践と理論を学ぶことに力を入れていく。

しかし、中国では、中央

ーニングを受けた農民が村へ帰って作った協同組合は既に三十近くになる。

また、世界各地のオルタナティブな実践を学ぶセミナーも開いている。中国各地から来た大学生が学院の仕事を手伝い、セミナーにも参加している。私が訪れた時は、中国で出版されたばかりのサパティスタ(一九九四年に発効した北米自由貿易協定に反対して、メキシコ・チアパス州で蜂起した先住民組織)の本を題

また例えば、協同組合や女性グループによって農民の共同性を創り出しているという考えは、かつての人民公社や集団所有とどこが違うのか、昔に戻れと言

疑問にもぶつかっている。木造と泥壁のモデルハウス

も、「レンガ造りの家を建てられるようになったのに、なぜ昔風の家を造る必要があるのか」と評判が悪い。

「外から『良い開発』を指導するのではなく、村に住み、村人と一緒に作業する機会を増やし、村の暮らしの中から受け継ぐべき伝統を学んでいく」。それが基本的な姿勢だと、香港から来てスタッフとして働くシンシアさんは言う。

学院の「ジェームズ・イェン」という名前は、一九二〇年代後半から三〇年代にかけてこの村で農村復興教育を大規模に実践した教育家にちなんでいる。マイ

エルル大学で学んだイェン氏は、中国民衆教育協会の仲間六十人とともに村に移り住んで農民の教育にあたった。温さんたちは、「労働と生活を共にし、農民の必要と問題、希望を理解する」というイェン氏の試みを再発見し、そこから学ぶとしていく。

この実験的な学院を基礎に、中国の農村を復興させようというのは、途方もない壮大な試みだ。しかし、農民が世界各地のオルタナティブの実践に学びながら、自力で農村を再建しようという動きは、少しずつ広がりは始めている。(毎週月曜日に掲載します)